

ことばの力を信じるほうへ

—臨床実習生証明書授与式で手渡してきたことばたち—

その2

林 耕司

長野医療衛生専門学校 言語聴覚士学科

要旨：当校では12年前から新3年生に対して臨床実習生証明書授与式が執り行われている。この授与式では学生が決意表明を行い、言語聴覚士の筆者がこれからの学生生活や臨床実習に臨むに当たって大事にしてもらいたいことばたちを学生に贈っている。本稿では、コロナ禍の2020年から2025年にかけて執り行われた臨床実習生証明書授与式で手渡したことばたち、「新しい日常」「微笑みながら」「変わっていく、そして変わる」「あおく そして初々しく」「天には青空 地には明日ありて」「新しき窓を」という題で語ってきたはなむけのことばたちを紹介した。

キーワード：言語聴覚士 臨床実習生証明書授与式 はなむけのことばたち

1. はじめに

筆者の私は言語聴覚士である。それ故に絶えず「言語」とは何かを考える生き物になっている。そして、いつも生きている不思議、ことばという不思議に思いを馳せている。

たとえば、＜ひび＞（日々）ということばが脳裏に浮かんでくる。そうすると、そこに＜き＞をつけてみたくなる。その結果、そこには＜ひびき＞（響き）ということばができあがる。こうやって50音を組み合わせると、無限大のことばの世界が広がっていくようだ。

最近の私はハンバート・ハンバートが“笑ったり転んだり”で歌っている歌詞＜まいにち難儀なことばかり＞をメロディに乗せてしきりに口ずさむようになっている。＜ひび＞（日々）が＜難儀＞に

満ち満ちているという一見後ろ向きに見えることばを口ずさんで歌っていると、不思議なことに自然に笑みがこぼれてくる。わたしのところに笑みが＜ひびき＞（響き）渡って広がっていくとなにか幸せな気分になっている。

さて、当校では12年前から臨床実習生証明書授与式が執り行われている。この授与式では、見学実習、評価実習が始まる3年生が皆の前で決意表明を行い、筆者が3年生に対して実習を通して成長してほしい、難儀な実習を価値ある実習へと高めてほしいという願いをこめて“ことば”を贈っている。以下、コロナ下で始まった2020年から6年間に、臨床実習生証明書授与式で学生たちに手渡

してきたことばたちを掲げていく。

2. 臨床実習生証明書授与式で贈ってきたことばたち

2-1 新しい日常

突然、天からコロナが降ってきて、いろんな言葉が飛び交った。「不要不急」「外出自粛」「オンライン」「感染者数」数え上げれば、もっともっとたくさんある。その中で「コロナ禍」という言葉が一番気になった。そうか、『禍』とは、災いを示す言葉なんだ、と思って辞書を引くと「禍とは予期していなかった災難や不幸、厄などを意味する」とあった。禍に気づくと、そうか、戦禍という言葉も盛んに使われているなあと遅まきながら気づいた。しかし、意味が分かっても僕はコロナ禍という言葉は使えていない。コロナがあつて大変ですねえ、とは言えるけれども……。新しい言葉が出現してきたとき、人々はどのように日常に溶け込ませて使っていくのだろう。そして「新しい日常」という言葉も登場し、「三密」を避けて行動し、マスクをして手洗いを励行するという日常が定着しつつある。

そこで僕は考える。あなた方に必要な新しい日常とは何なのかと。2年生の時はあなた方には驚かされてきた。消されない黒板の板書、休み時間にほおぼるおにぎり。そして、あなた方も3年生になり一生懸命が出てきて、朝、僕が教室のドアを開けて入っていくと元気のよい挨拶が聞こえるようになり、授業での目の色も、真剣そのものになってきた。見学実習もみんな見事にこなし、「楽しかった」との感想もきかれた。すばらしい。そこであなた方がさらに成長していくのに必要な新しい日常。それは『きちんと朝食を食べ、しっかりと勉強し、深く考え、気遣いや思いやりを忘れず、早

めに寝る』というシンプルな日常なんだろうと思う。どうだろうか。

Hさんは、気になっている言葉は、と問われて「葛藤です。最近、心の中で葛藤していることが多いから」と自分の戸惑いを隠さない。好きな言葉は、と問われてMさんは「毎日100%でいることは難しい。40%でも60%でもその中でできる100%でいればいい」と日常の自分を肯定し頑張ろうとしている。そして、Kさんは新しい日常をどう創り上げていくかと問われて「一人でも誰かとも負けない心を持って毎日に挑みたい。楽しくても、辛くても“満足”できる毎日を！！」と高らかに言い放つ。言葉を鏡にして自分を分析し、言葉を杖にして自分を高めようとする気概にあなた方の成長が見て取れる。これもすばらしい。

「禍福はあざなえる縄の如し」という、よく知られた言葉がある。幸福と不幸は、より合わせた縄のように交互にやってくる。葛藤はあるだろうが一喜一憂しないで自分で考える新しい日常を自分のものにして、一層の成長を遂げてほしいと願っている。今日は臨床実習生証明書が手渡された。本当におめでとう。いよいよ本格的な実習が始まる。ますます自分を磨いてほしい。映画「鬼滅の刃」が流行る時節だ。言の葉が“言の刃”にならぬように気をつけながら過ごし、未来に出会う困難を抱えた人々に光が与えられるように精進していこう。

(2020年11月4日 第18期生 臨床実習生証明書授与式にて)

2-2 微笑みながら

新聞に＜紫陽花に雫（しずく）あつめて朝日かな＞（加賀千代女）という俳句が載っていた。

我が家に、母の日の玄関先に置かれた青々と瑞々しく咲く紫陽花も、久しぶりの朝陽を浴びてきらきらと光っている。

今年は全国的に梅雨への突入がずいぶんと早いようだ。いつも散歩している犀川沿いの道には、いつの間にかアカシアの白花が激しく咲き競っていた。

激しいといえば、世界は激変した。いつも通りを生きているつもりだった世の中も、色とりどりのマスクで彩られるようになった。先日、あなたがたのクラスのHさんと朝出会い歯科衛生士学科の建物の横から入って、花咲く小路を歩いて学校に行った。秋には金木犀の香りがするねと言って微笑みを交わしながら。世界は激しく変わったが、自然やあなたがたのやさしいところもちは変わらずつついているなと思ってほっとした。

38億年前に地球に生まれた一個の細胞を、われら一人一人が受け継いで僕らは生まれ、何兆もの細胞のなかには原始の海に似た物質が含まれているそうだ。すごいことだ。地球はマグマの噴出する灼熱の大地であったり、一万年もの間、雨が降り続いた激変を経て、今現在の青い青い地球になったようだ。

そんななか、あなた方はこの地球に生まれ、そして不思議に恵まれ、この学校に入り言語聴覚士をめざしている。この学校の先生方は、ほんとうに一生懸命だ。

哲学者ニーチェを知っているだろうか。彼は、「踊る神を信じよ」と、書物のなかで、われらを鼓舞し続けている。エネルギーに満ちている状態をニーチェは「踊る」と喻えたのだ。

1・2年生の間は遊んでいても、やる気がなくてもなんとかなった。しかし、もう付け焼刃はきかない。暗記はきかない。考えて考えて考える時期だ。そして今日からはニーチェの言うように踊ってみよう！毎日毎日のエネルギーに満ちたプロセスこそを大事にしよう。3年生になり、あなた方には僕の授業でまっすぐに僕からのメッセージを聞き取ろうとする態度がみられてきた。あなた方の未来にはあなた方の助けを必要とする人々がいっぱい待っている。国家資格をとれば言語聴覚士という仕事がある。あなた方の人生の背骨を作っていくことだろう。未来には「ありがとうございました」と言われ「いっしょにもう少しがんばりましょう」と言える仕事に就いたことの喜びが待っている。

多くの人々に寄り添う仕事には、もちろん大きな責任も伴う。どんどん進む科学的知見。日々勉強し、精進する義務があることにも大きな喜びを感じていこう。これからも照り返しが強くて息もできない日、どしゃぶりの雨にさらされる日もあるだろう。そんなときは“微笑もう”。微笑みが生きるためのエキスとなる。これからの2年間、あなたがたがエネルギーに満ちて踊りながら微笑んでいける姿を何度でも見たいものだと思っている。われわれ教員もあなた方と同じように少し肩の力を抜いて微笑みながら伴走していきたいと思っている。今日はいい日だ。ほんとうにおめでとう。こころ高らかにあらためて出発しよう。

(2021年5月29日 臨床実習生証明書授与式にて)

2-3 変わっていく、そして変われる。

「まさか」というようなことが続いて起きている。11年前の東北大震災、2年前からのコロナの襲来、そして今年に入ってからロシアのウクライナ侵攻。その結果、日本では人々のなかで防災意識が高まり、コロナ危機をなんとか防ごうとして、マスクに象徴されるような新たな行動様式が定着した。そして、戦争を仕掛ける性(さが)を持つ人間の業に、こころは毎日ざわめき傷ついている。世の中の激しい変貌が人間のこころをかき乱しながら時は進み続けている。

医療の世界に目を転じてみても、手術では今後ロボットが当たり前活躍するようになるだろう。摂食嚥下の世界でも、看護師が一目でわかる嚥下障害の映像が示されることになるだろう。このように、医学の世界でも、革新につぐ革新が次々になされていくことだろう。

では、このように変化が当たり前におこっている時代にあって、われわれSTに求められているものは何だろうか考える。

1つには今の知識・知見をしっかりと身につけ、その知識・知見が古びたら新しく更新していく努力を惜しまない態度が必要だ。知的好奇心に燃え、

学ぶ喜びにこそ奮わせながら学びを確実なものにしていくことが求められている。

2 つ目には社会に奉仕していこうとする精神がさらに求められていくだろう。たとえば失語症という障害の世界では長野県でも失語症者とその家族を支援する失語症友の会が創られた。そして、その基盤を ST がしっかりと支え、会話ボランティアを養成したり、医療・福祉で働く人々を対象にしたコミュニケーション障害講座を展開してコミュニケーション障害の理解を深めてもらったりしてきた。この 40 数年間に ST が開拓してきた領域は、ICF に照らし合わせてみると、活動・参加・環境・個人を生かす道だったといえる。この ST の伝統や心意気を引き継いでいってもらいたいものだと思う。

3 つ目には、自分のなかにある情緒をしっかりと花開かせていくことだ。他者の喜びや悲しみ、生きる哀しみに共感して他者の気持ちに共振する能力は臨床家にはなくてはならない能力だと思う。日々考えを深め、いろんなことを見聞きし、読書するなかで自分の中にある情緒をはぐくんでほしいと思う。

生きるということをボート漕ぎにたとえて考えてみよう。今と過去をしっかりと見つめ、見えない未来に向かって自分という尊い船を前に前に進めていこう。嵐の日々もあるだろう、凪いだ気持ちのいい日々もあるだろう。いろんなことが起こるのが人生。変わりゆく世界において、自分を「自主・愛・至誠」のある私へと変えていく力のある人間に育っていこう。あなた方には、自分をよき方向へ変える力がある。どきどきしながら、悩みながら、そして楽しみながら成長していこう。今日は臨床実習生証明書授与式という節目の日。ここまでたどりついた自分に“おめでとう”を言おう。乾杯だ。ほんとうにおめでとう！最後に一つの詩「胸の泉に」（ハンセン病の詩人・塔和子作）を読み上げて私からのエールとします。

（2022 年 5 月 28 日 臨床実習生証明書授与式にて）

2-4 あおく そして初々しく

春風や闘志いだきて丘に立つ（虚子）

黄砂や花粉が飛び交うなか、木々はどこまでも美しく花を咲かせ青々とした葉を初々しく伸ばしてきています。いい季節が巡ってきました。ここに集っている皆さんも 2 年という長きにわたってコロナに翻弄されながらも着実に自分なりの花を、そして実をつけてきています。今日は臨床実習生証明書授与式という気持ちを新たにし飛躍を誓う日です。どんな気持ちでこの場に立っていますか。

この頃の私は、生きている現実が幻に見えてしまうという体験を重ねてきています。私にとって時はすさまじく速く飛び去るからでしょうか。現も幻に思えてきています。皆さんにとってもこの 2 年間は過ぎてみるとあつという間の年月だったのではないのでしょうか。さて、皆さんは、日々を生きるにあたって、どこに光を当てて生きてきましたか。自分や他者のことば、こころに耳傾けながら、一生懸命に言語聴覚士が必要とする学問を学ぼうとしてきたことでしょうか。井戸から新鮮な水を汲みとって喉を潤すように、言語障害・嚥下障害の真髄を汲みとって、自分の生きる糧とする努力がなされてきたことと思います。これはほんとうに喜ばしいことです。何事かを汲みとろうとして努力する力、どんな事を汲みとろうかと探求していく力は皆さんの一生を潤していく力となることでしょうか。しかし、苦しい時もしばしば訪れたのではないのでしょうか。「孤独がときに襲ってくる そんな不穏なときには 孤独を片手で丸めて ポケットに入れてしまう そうして一呼吸おいて 青空を眺めてみる 雲は雲らしく輝いて 青空は透き通っている」と言ったのは寺山修司だったのでしょうか。苦しいときに見つめるのはスマホではなく自然であつたらいいなと思います。自然はまさに沈黙のコトバです。あなたがたに慰めをもたらすでしょう。

さて、今日はおおいなる夢に向かってもう一段ギアを上げる日です。澁澤龍彦が小説の中で次のように言っています。「夢によってとぶためには中身をとりにかえて そこに新鮮な夢を満たす必要があろうかと存じます」と。あなた方にとっての今日からの新鮮な夢とはどんなものですか。今日からあなた方一人一人が個性豊かな新鮮な夢を詰め込んで、授業に、そして臨床実習にまい進することを祈っています。もちろんわれわれ教員一人一人も新たな自分の夢を乗せてあなたがたの力強い相棒でありたいと思っています。春風や、闘志いだきて丘に立つ。高らかに高らかに、そう宣言して新たな一步を踏み出しましょう。

最後に、私が2004年に詩劇『「いのちの言葉」響かせて』で発表し、コーロソアーベ合唱団によって合唱組曲として歌い上げられた詩『「いのちの言葉」響かせて』を聞いてください。失語症者を想って書いた詩です。みなさんの1年後2年後、さらにはその先の年月を重ねながら聞いてみてください。

(2023年4月29日 臨床実習生証明書授与式にて)

2-5 天には青空 地には明日ありて

“月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人なり”という松尾芭蕉が「奥の細道」で書いたことばがある。月日も年も旅をし続け、われわれも流れていく時の中で人生の旅を続けている。

今日の臨床実習生証明書授与式に立つまでの20数年間、皆さんはどんな歩みをしてきたんだろう。どんな思い出を残しながら歩みを進めてきたんだろう。特に、専門学校に入ってから2年間は、全く知らなかった医学用語や専門用語に押しつぶされそうになったり、覚えることの多さにたじろいできたのではないのでしょうか。でも、皆さんはこの授与式に立派に立っている。乗り越えなければいけないことを乗り越え、言語臨床で必要とされる知識が少しずつ増えていくことに、喜びと手ごたえを感じてきたのだと思います。臨床実習生の証

明書を手渡された今は、どんな気持ちになっていますか。前に向かって進もうという気持ちがある反面、実際の臨床現場に立って、評価実習をこなせるんだろうかという不安も大きく渦巻いていることでしょうか。私も何かあると常に不安な気持ちに駆られます。不安をもたらずのは脳の悪い癖です。その不安にいつまでもお付き合いはせず、今日でできること、今できることに集中していきましょう。知識が増えれば、楽しみも増します。いざ臨床実習に出れば、臨床の面白さに目を丸くして驚きます。そう！驚きましょ。いろいろな知識を身につけて、自分を、そして相手をびっくりさせることを楽しみましょ。

月や星を見るたびに、僕ら人間は、宇宙というとても広い、おおいなる世界に生かされて在ることを感じます。また、人間を含めてあらゆるものが目には見えない原子というものから成り立っていることを知るにつけ、“大切なものは目には見えない”という星の王子さまの声も聞こえてきます。

学校生活の中では、まだまだマスク越しのコミュニケーションが強いられていることも多いようです。マスクの下には大事な唇が隠れています。辰(たつ)の下に口が書かれると唇が現れます。今年は辰年でもあります。元気な声は唇から放たれます。皆さん今日は「落ちない口紅」といわれるリップクリームのリップモンスターをつけているのでしょうか。唇に晴れやかなリップをつけて、これからの実習では決して落ちてなくなつてはならない決意を胸に秘め、悠々と前に進んでいきましょう。

北陸新幹線が敦賀まで開通しました。芭蕉は旅の終わりに近づいた敦賀の章で、「名月や北国日和定めなき」と詠み、名月を楽しみに来たのだったが、北国の天気は変わりやすく月も見えないと言っています。こころの天気もくると変わります。それがこころの日常だと思い定めつつ、自分

の物語を創っていきましょう。旅はまだまだ続きます。友に、家族に、教員に、助けられ、励まされて一步一步進んでいきましょう。天には青空、地には明日が待っています。

(2024 年 4 月 27 日 臨床実習生証明書授与式にて)

2-6 新しい窓を

「あっという間だったね」これは食事所に入るなり、20 年ぶりに再会した友だちが言ったことばである。「早いねえ」これは携帯電話に出るなり、入院中の義理の弟が言ったことばである。彼とは一週間ぶりの声のやりとりだった。20 年にしても、一週間にしても時が過ぎれば「あっという間」だ。芭蕉も言っているように、僕らは時間の中を日々旅している。みんなが 2000 年代を生きた 20 年という旅路はあっという間だったろうか。そして、ST をめざしたこの 2 年間の新たな旅路はどんなふうに過ぎていったのだろうか。知識が増えていく喜びに包まれていただろうか、それともあまりに覚えるべき多くの知識の重さに圧倒されてきたのだろうか。知識というものは自分の中での理解、納得が進めば自分の歩みは軽くなり、その逆となれば自分の日々の歩みは重くなり、勉強もつらいものとなっていくだろう。

今日、臨床実習証明書が授与された。この機会をとらえて自分の中に『新しい窓』を作ってみないか！そう、新しい窓だ。臨床の場に臨んでいると突然「新しい窓」が与えられることがある。

先日も療育施設で 3 歳のことばのない子どもと遊んでいてびっくりさせられた。人形のポポちゃんを布団に寝かせる遊びをしながら、僕も眠ったふりをしていた。そうしたら、意味あることばを持たないその子が椅子から立ち上がり、僕のそばまでやってきて「PIKIPIKIPKI」と大きな声で言ったのだ。この状況からして当然「起きてくれ」という信号を発したのだと思う。ぼくが驚いたのは、意味あることばを持たなくても、なんらかの声を

発することがコミュニケーション相手を動かすことを知っていたことだ。こんな経験は初めてだったが、これはまさに子どもを見る「新しい窓」が自分の中に芽生えた瞬間だった。思い返してみても驚くべきびっくりな瞬間だったと思える。

知らないことが分かった瞬間には「新しい窓」が必ず与えられているんだと思う。なかなか机にむかって勉強できない日もあるだろう。自主的に勉強するには＜やる気と忍耐と努力＞が必要となる。只管打坐、瞬間瞬間に没頭して生きよと説いた道元さんは修行の要諦として、＜強いてやる・無理にやる・何としてもやる＞をあげている。僕も勉強したりする気が起きない時、強いて机に向かって本を開いてみると不思議とやる気が湧いてきたりすることがある。辛抱しながら自分を励まし、自分を楽しませながらしっかりした一日一日を送っていきたいものだと思う。落ちない口紅のリップモンスターがずっと気になっている。それと共にやる気の落ちない勉強法とはなんだろうかといつも考えている。

さて、萌え出ずる青々とした若葉が目眩しい季節になった。勢いよく伸びていく青々とした芽吹きをみていると、生きるとは無心に、天に向かって伸びていくことだと思う。良寛さんは「つきてみよ一二三四五六七八九十 十とおさめてまはじまるを」と詠んでいる。良寛さんが子どもたちと手毬をつきながら一日中楽しんでいたように、僕らも気軽に楽しく、そして何事かに熱中して生きていこうではないか。

本日は皆さんに臨床実習に出てもいいよという宣言がなされたことになる。臨床の中にはわからなさがいっぱいであり、僕にとってもいつも臨床は難しいが、楽しい。対象になる方々やその家族の「ありがとう」の声は大きな支えにもなる。教員一同みんな張り切っている。今年も切磋琢磨して頑張ろう！

(2025 年 4 月 26 日 臨床実習生証明書授与式にて)

(註) 臨床実習生証明書授与式とは

4 年制の専門学校である本校では医療機関での臨床実習が3 回課されている。

1 回目は3 年生の夏の1 週間の見学実習、2 回目は冬12 月の3 週間の評価実習、3 回目は4 年生の夏の8 週間の総合実習である。

そこで本校では2014 年から臨床実習前の4 月に臨床実習生証明書授与式という儀式を執り行い、3 年生が2 年間の基礎学習を終了したことを認め、臨床実習の対象学生であると認定している。

そして、この授与式において、初めて臨床実習に旅立つ3 年生の学生たちが決意表明を皆の前で披瀝し、それに対してはなむけのことばを贈っている。

本研究は成田会倫理委員会の承認を得て行われた。
本研究に関する利益相反はない。